

知覧には「あくまき」もある。

ちまきである。40余年前、知覧の家の庭にはかまどがあった。薪をくべてタケノコやちまきを茹でるのである。義母はよくそばを湯がいてくれた。土地の畑で採れたそば粉をこねて、包丁で丁寧に細く切り、かまどで湯がくのである。だしは枕崎のかつお節を削り器で削る。この役目はわたしであった。湯がきたてのそばに枕崎のかつお節のだしである。

まずいわけがない。朝昼晩、3日も4日も食ったが飽きなかった。

どうも、義母はわたしを知覧に居着かせようとした節がある。タケノコとシイタケ、地元野菜やこんにゃくの煮しめもうまかった。義母は「明日食

知覧には居着かず

まずいわけがない。朝昼晩、3日も4日も食ったが飽きなかった。けが先に知覧に帰った。わたしの表情で察した医者「もう、いつ退院しても大丈夫です」と言ってくれた。1人で鹿児島港へ向かった。鹿児島空まで迎えに来てくれたのも塗木博人

いまは庭のかまどもない。かまどは穴が開いてぼろぼろになっていた。かまどは役目を果たしたのである。だれかが持ち去った。わたしも知覧に居着くことはなかった。やはり、松浦子であった。しかし、晩年は居着くことになるのかもしれない

でも、こんにゃく」といった駄

さんである。知覧には塗木という地名がある。その集落の人たちは塗木の姓を名乗る。今年亡くなった義母の妹の息子であるとアユのにおいがする。上志佐

い。あつ、もう晩年か。

わたしは一時期、知覧と松浦の交流を真剣に考えたことがあった。松浦党の話も酒席で語った。知覧の人はあまり乗り気ではなかった。それはそうだが、知覧には全国から人が集まる。

じゃれもいった。言い慣れた口ぶりであった。いまは親戚の塗木博人さんがそばを打ってくれた。お会した時には青年であったが、もう役場も定年退職だそうである。頭髪には白いものも交じっている。

ある。因縁を感じる。

1パーには全国から集めた食品

（松浦市出身）